

## 『お伽草紙』戦時下の太宰治

### — 書けなかった桃太郎 —

保科 綾香

#### はじめに

太宰治は、古典、他人の日記、聖書などを引用または換骨奪胎して自分の作品に作り替えること、また、私小説をパロディ化し現実と虚構の間に読者を誘うことを常套手段とした作家であり、『お伽草紙』でもその手法を駆使している。

『お伽草紙』は、昭和二十年三月に連日の空襲警報の中で起稿され、六月末に完成した、太宰三十七歳の時の作品である。空襲で三鷹の家が一部損壊し、留守を小山清に託して甲府へ疎開するなど混乱の中で書き継がれ、戦争の終わった昭和二十年十月に全編書き下ろしの単行本として筑摩書房より発表された。戦前に書かれ戦後に発表されるという、時代状況や価値観の大きな変化が作品の外側にある。昭和二十一年二月には再版が出され、それまで無題であった序文に「前書き」という題が付けられて、絵本からの引用部分がゴシック体に改められた。

小説家が防空壕の中で昔話のパロディを子供に語り出す「前書き」と、この小説家によって語られた四編（「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」）の物語から構成される。他者から疎外される〈弱い〉主人公を据えて、昔話のもつ善悪の対立を排したところに特徴がある。

この悪不在ということに対して高田知波氏（注 1）が次のように述べている。

「所謂『不正』の事件」が「一つも無い物語世界を紡ぎ出すことが、敵＝極悪、味方＝正義という二分法が日本全体を強制的に支配していた太平洋戦争末期の「悪気流」との関係の中においてもっていた意味をわれわれは見落としてはならないだろう。

確かに戦時中悪不在の物語を書いたことに戦争への抵抗をみることはできる。しかし、表面的に物語の中に善悪の対立が描かれないことを、日本と英米の対立の解消とすぐさまイコールで結んでよいのだろうか。対立が存在しないのは、日本人なら誰でも慣れ親しんだ記憶のある昔話の世界、においてである。本稿では、戦時下の太宰が東洋の世界を見つめるまなざしに焦点を絞り、口承文芸である昔話を戦時下にいかに関与したのか考えてみたい。

#### 太宰の『お伽草紙』

##### 1. パロディと防空壕

（パロディ）の目的として、元の価値を転換させる・権威を失墜させるということが考えられる。昔話には善悪の対立があり、そこから導かれる教訓があるが、『お伽草紙』ではこの善悪の対立をひっくり返す。つまり、人間関係に失敗し疎外される人物が登場する悪不在の物語に語り直すのである。「瘤取り」では、次のように語られる。（傍線は筆者による。以下同）

「時に、なんだね、」とお爺さんは少し酔つて来ると話相手が欲しくなり、つまらぬ事を言ひ出す。「いよいよ、春になつたね。燕も来た。」

言はなくなつていい事である。

お婆さんも息子も、黙つてゐる。

「春宵一刻、価千金、か。」と、また、言はなくてもいい事を呟いてみる。

作者はこのように語り手という特権的立場から、登場人物たちを批評している。しかし語り手は自身についても「服装もまずしく、容貌も愚なるに似て」いて、という具合に自己批判しながら語っていて、人間関係の失敗という点で作者と主人公たちは結ばれている。

次に、この小説を語っている場（防空壕）についてであるが、「瘤取り」ではこのように言及されている。

私は、いま、壕の中にしゃがんでいるのである。そうして、私の膝の上には、一冊の絵本がひろげられているだけなのである。私はいまは、物語の考証はあきらめて、ただ自分ひとりの空想を繰りひろげることとどめなければならぬだろう。いや、かえってそのほうが、生き活きして面白いお話が出来上るかも知れぬ。

防空壕とは、空襲やミサイル攻撃の被害を避けるための地下壕である。そこが身を守る場、外部と遮断されている場であることを考えると、〈防空壕〉は他者に干渉されない「私」の世界、と読み替えることができるのではないだろうか。〈防空壕〉は〈小説〉の比喩なのだ。

では、その外部から遮断され守られた〈小説〉の中で昔話のパロディとして何を語るか、次に考察してみたい。

## 2. 「桃太郎」を書かなかったのはなぜか

「桃太郎」は五大国民童話の筆頭であり、最も人気がある作品だ。語り手は桃太郎について「完璧の強者は、どうも物語には向かない。」「この詩の平明闊達気分を、いまさら、いじくり廻すのは、日本に対してすまぬ。いやしくも桃太郎は、日本一という旗を持っている男である。日本一はおろか日本二も三も経験せぬ作者が、そんな日本一の快男児を描写できるはずがない。」とって放棄する。桃太郎は作品が書かれた当時〈強さ〉〈日本一〉の象徴であったのだ。

そもそも『お伽草紙』とは室町時代に制作・書写された物語の総称であり、狭義には江戸時代に刊行された「鉢かづき」「物くさ太郎」「一寸法師」「浦島太郎」など二十三編を指す。

明治に入って巖谷小波が「桃太郎」「瘤取り」などの伝承童話をまとめ、明治二十七年に『日本昔話』として出版したことにより昔話が児童に定着した。折しも時代は日清戦争下（明治二十七年～二十八年）で、小波の桃太郎にも戦時色がうかがえる。

元来此日本の東北の方、海原遙かに隔てた処に、鬼の住む嶋が御座ります。其鬼心邪にして我皇神の皇化に従はず、却て此の蘆原の国に寇を為し、蒼生を取り喰ひ、宝物を奪い取る、世にも憎き奴に御座りますれば、私只今より出陣致し…

ここで鬼ヶ島は清国をイメージさせるものとして書かれている。桃太郎は、海外遠征による領土拡張政策と結び付いたのだ。また、日清戦争の盛り上がりが民族意識・国民意識の高まりとなり、昔噺という形で伝承国民説話がとりあげられ、少国民のために与えられたのである。大正時代になると、桃太郎の弱きを助け強きを挫くという性格が教育に導入されていく。巖谷小波は『桃太郎主義の教育』（大正4年2月、東亜堂書房）を訴え、台湾にも講演に行っている。

そして昭和十六年十二月八日、太平洋戦争（日本では大東亜戦争）が始まった。戦時体制の中で、桃太郎には国家体制のイデオロギーが付加され、帝国主義や鬼畜米英打倒のための侵略軍を象徴する存在となっていくのである。以下は前出高田千波氏の論で指摘されている点であり、本稿でも参考にした。

滑川道夫氏（注2）の研究によると、昭和十八年には、漫画映画「桃太郎の海鷲」が上演され、昭和の桃太郎が海鷲となって鬼ヶ島軍港（真珠湾）を爆砕して全国の映画館で喝采をあげる。また、昭和十九年には、雑誌「少国民文化」の新年号の巻頭に『桃太郎の出陣』という詩が掲載されている。この詩では隊伍を組む少国民の姿が描かれている。

日本ちゆうに桃太郎が産まれる。  
つよい 桜色の桃太郎が産まれる。  
日本ちゆうの桃太郎が出陣する。  
一人残らず出陣する。  
工場に向って出陣する。  
学校に向って出陣する。  
戦場に向かつて出陣する。  
海と、空へ  
出陣する。  
桃太郎が隊列を組む。

どっし どっしと足踏みをする。（第六連）

当時、桃太郎に軍国主義イデオロギーを見るのは当然のことであった。中部軍の「桃太郎従軍ポスター」には「征け桃太郎・米英を撃て」の文字が、また「音楽劇・桃太郎」（昭和十九年上演）のプログラムには「撃ちてし止まむ！」の文字が躍る。

このように帝国主義や鬼畜米英打倒のための侵略軍を象徴する存在となった桃太郎を『お伽草紙』の作者太宰は放棄するのである。自己を登場人物に投影し戯画化できても国を戯画化することはできなかったであろう。

それでは始めから「桃太郎」について作中で触れなければいけないのである。書くことができないと敢えて作中で語ることは語り手の戦略なのだ。「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」の各主人公は反社会的な人物として描かれている。〈日本一〉立派な桃太郎を放棄する理由の件は、書かれた他の四編と同じく〈弱さ〉を書く宣言であるのだ。

## 3. ギリシャ神話と対比される日本のお伽噺

では、〈弱さ〉を書き善悪の対立を排したことが戦争への抵抗となったのであろうか。物語中に善悪の対立がない『お伽草紙』であるが、語り手の言説の中では日本と外国、お伽噺とギリシャ神話、が明確に対立している。繰り返される両者の対比や日本賛歌は、イデオロギー過剰と言わざるを得ない。

「瘤取り」で対比させられているのは、「殺人鬼、吸血鬼」と「瘤取りの鬼」である。「殺人鬼、吸血鬼、などと憎むべきものを鬼と呼ぶ」「殺人鬼、吸血鬼などの如く、佞悪の性質を有してゐる種族」という具合に鬼に醜悪の性質を見いだすが、瘤取りの鬼は「ひどく陽気で無邪気な鬼」「頗る穏和な性格の鬼」とはっきりと区別されている。

「浦島さん」では、「エデンの園の蛇」が「佞奸邪智にして、恐ろしい破滅の誘惑を囁くような性質のもの」であるのに対して、「亀」は「愛すべき多弁家」「何の

悪気もなかつた」と評価される。また、「パンドラの箱」が「はじめから神々の復讐が企図せられてゐた」のに対して、「竜宮のお土産」からは「無限の許可」「深い慈悲」という教訓を導き出す。

どうにも、これはひどいお土産をもらつて来たものだ。しかし、ここで匙を投げたら、或ひは、日本のお伽噺はギリシヤ神話よりも残酷である。などと外国人に言はれるかも知れない。それはいかにも無念な事だ。また、あのなつかしい竜宮の名誉にかけても、何とかして、この不可解のお土産に、貴い意義を発見したいものである。

語り手はことさらに日本を擁護しようとする。日本のお伽噺の、人間の弱さを認めるという価値を積極的に見出そうとしている。

「舌切雀」の桃太郎削除の部分では、ギリシヤ神話の「メデウサ」の邪悪さと「日本の化物」の善良さが比較される。「メデウサ」は「ギリシヤ神話に於いて、最も佞悪醜穢の魔物」であり「このやうな魔物は、最も憎むべきものであり、かつまたすみやかに退治しなければならぬもの」であるが「それに較べると、日本の化物は単純で、さうして愛嬌があり、「一向におそろしくも何とも無い。善良なものやうにさへ思はれる」と評される。日本の化物を指す「単純」「愛嬌」「善良」ということばからは「私」の語りたい日本のお伽噺が見えてくる。

このように、ギリシヤ神話に出てくるものは徹底的に邪悪なものとして、日本のお伽噺に出てくるものは無邪気で愛嬌があるものとしてそれぞれ語られている。ギリシヤ神話に完全な悪をみることで、日本のお伽噺

の人物の駄目だけれども悪ではないという性質が差異化されてくるのである。

#### まとめ — 戦時下の防空壕で、昔話を現代の物語として語り直すことの意味

昔話という東洋的世界においては善悪の対立を取り払われているが、昔話とギリシヤ神話という大きな枠組みで捉えたとき、この『お伽草紙』は西洋世界と対立している。「カチカチ山」一篇にあつては、兎が残酷な性質のものとして語られるが、これは兎にギリシヤ神話の「アルテミス」のイメージが付与されているからで、昔話の中で愚鈍な狸と直接対立していても、その対立構図は東洋対西洋であると考えられる。

〈防空壕〉は小説の比喩であると述べたが、『お伽草紙』はその〈防空壕〉の中で、東洋なるものの中に、人間関係に失敗し疎外される人物を据え、語り手の立場を利用して批評・同情し、人物たちの〈弱いけれど悪ではない〉性格を際立たせ、より大きな敵〈完全悪としての英米〉と対置させているのである。

太宰のパロディの目的が、登場人物に託された自己の戯画化であることは確かであるが、戦時下において〈弱さ〉を日本のよさに転換しようとした語りの戦略を見逃してはならない。

#### 注

1. 高田千波「除外のストラテジー——太宰治『お伽草紙』論への一視覚」(『駒澤國文』平成七年二月)
2. 滑川道夫『桃太郎像の変容』(東京書籍、昭和五十六年三月)